

講師 岡田 順一（編集著述家）

演 題：『万華鏡』から『越中人譚』制作まで ー企画・取材・広報ー

日 時：平成12年7月27日(木)環境教育研究

8月11日(金)カリキュラム研究/福祉健康教育研究/市職員

『富山写真物語・万華鏡』『越中人譚』等を創刊。写真集として『GYOGAN』『GINREI』等を出版。

◆キーワード（話の内容から）

[子供たちに名刺をつくらせる発想] [富山が万華鏡に見える] [郷土先賢の必要性]  
[一つの仕事を方向を変えて考えてみる] [一つのことを一つで終わらせない]

1 講演（要旨）

(1) 自分を知ってもらうために

自己紹介の前に、まずは名刺を配ります（名刺の裏には岡田氏の似顔絵が書いてあるなどとてもユニーク）。学校の先生たちには名刺がない、名刺を持たないのが普通であるとお聞きしましたが、それがとても不思議です。名刺というのは、この1枚の中に自分の情報を盛り込んでどれだけ相手に自分をわかってもらえるかを考えて作るのです。学校というエリアの中に入っていれば名刺というものは必要ではないとも思います。しかし、子供たちに名刺を作らせるという発想があってもおもしろいのではないのでしょうか。例えば、自分の好きな食べ物や好きな教科を書かせるとかはどうでしょうか。ひとつのネットワークを作るきっかけになると思います。どうせ学校以外の場＝社会で学んでいくときに、名刺は、必要となるので、学校生活の中に取り入れてもらっても良いと思います。

名刺に書いてある岡田徳右衛門順一という名前に驚かれると思います。これを使うようになったのは、自分のルーツを調べていったときにこの名前に出会ったわけで、昔の自分の家の屋号のようなものです。初めて人とお会いしたときにまずは名刺を渡すと、この名前のことで質問されるので、ここから始めるとインパクトがあって自分を知ってもらえるのです。

(2) 編集者からのスタート

大学を卒業したあと、編集者として会社に就職した。仕事の内容は、企業向けのカatalogや会社案内・PR誌担当だったが、自分の希望は地域出版だったので、この仕事内容がとても嫌で6年ぐらい勤めた後30歳で退職した。今から思えば会社勤めで、いろんな体験ができたと思っている。30歳の時、地域的な仕事をしたいと思い、『万華鏡』を構想した。きっかけは、NHKで土門拳※1が亡くなっ

名刺の必要性

子どもたちに  
名刺を

インパクトあ  
る表現

『万華鏡』の  
構想

たという特集をやっていて、それを見た後、山形の酒田にある土門拳美術館に美術館に行った。それまでは、写真＝コマーシャル＝商品撮影だったので写真そのものを軽視し、がっかりした面を持っていた。しかし、美術館で写真を見たとき、写真というものを見直す機会を得た。そして富山に帰ってきたときに、郷土を写真と言葉で表し、相乗効果を得れるようなものを作ろうと考えた。写真だけだとこちら側の考えすべてを理解してもらうのは難しい。また、活字の嫌いな人には文字だけだと読んでもくれない。そこで双方補うような形の、活字を読みながら写真をつけたものを作ろうとしてできたのが『万華鏡』である。

※1 土門拳（1909～1990）写真家。山形県酒田市に生まれる。リアリズム写真を確立した写真界の巨匠。報道写真の鬼と呼ばれた時代もあり、その名は世界的に知られている。

### (3) 『万華鏡』創刊

自分は、ずっと一人で活動してきた自己完結型の人間である。自分でやらないと気がすまないところがある。どうしても、自分でやれないときだけ、例えばスタジオを使わなくてはいけなときはスタジオカメラマンに頼むとか、自分の手に負えない分野のときにはその分野の専門家に頼むという方法を取っている。

『万華鏡』は、70号を発刊した。テーマを決め、4つの話で構成し1冊の本にしている。例えば、ブリをテーマにしたものは、

- ・ブリとは何？（生物学的）
- ・ブリを食べる、郷土料理（民俗学的）
- ・漁業網元、定置網（産業・社会学的）
- ・ブリ文化（宗教学的）

と同じテーマを様々な分野から見ている。こういう見方をしていると、ふるさと富山が万華鏡のように見えてくる。これが、『万華鏡』という書名に至った理由である。また、これが自分のやりたかったことでもあった。

しかし、自分で作ってみたい本は、会社側からみると採算が合わないものである。会社というところは採算が合わない仕事はやらない。本屋でも売れない書籍は廃棄処分にあってしまう。そこで、自分一人で作った本を売るには、書店で販売する方法ではいけないと思い、違う方法を考えた。郷土のことをもっと知ってほしいという、私の考えを支援してくれる人たちに、本を全部買い取ってもらう方法を取ったのである。また、本には広告を絶対に入れないスタンスを通した。

広告がある本というのは、売れなくても広告料で採算がとれる。しかし、広告があると本はすぐ古くなり、誰もその本はとっておいてくれない。ほとんどの人は捨てるのである。本を作った者にとっては、とても悲しいことである。私は、理想かもしれないが、私の作った本は、読者が努力して手に入れる形をとりたかったのである。

郷土を写真と  
言葉で表す

テーマは4つ

富山が万華鏡  
に見える

支援者による  
買い取り方式

広告を入れない

#### (4) 立山神殿御遷宮に至る

1991年秋出版の『万華鏡』1号の「立山神殿」を出版後、多くの人たちから反響があった。それは、広瀬誠先生※2の執筆された文の中の、「140年前立山で御遷宮があった」という部分でだった。多くの知識人たちの激論の末、もう一度御遷宮を実施すべきだという事になり、1993年（平成5年）5月の北日本新聞に決定事項が記載された。そして、1996年（平成8年）御遷宮が行われた。「神殿の解体・撤去・神体を出し仮殿から本殿に移す・神殿再建」、これらの貴重な写真を撮ることで、多くの人と知り合いになることができた。また、人の目に絶対触れないことを写真という方法で伝えることができ満足している。

このように、立山御遷宮は、『万華鏡』から始まったとも言えるだろう。まさに活字の力である。また、立山を撮り続けることで、四季の立山を紹介する季刊誌『霊峰立山』、立山版万華鏡を発刊することにもつながったのである。

※2 広瀬 誠（1922～）郷土研究者。富山県の郷土史家として活躍。著書には『越中奥山の地名』『立山のいぶき』等多数出版。富山県文化表彰、社会教育功労文部大臣表彰を受賞。

#### (5) 『富山湾魚類図鑑』を各学校に

ある日、息子が食卓に並んだ魚を見て、「お父さん、この魚オス？それともメス？」「富山湾のどこにいるの？」と聞いてきたが、私はこれに全く答えられなかった。

何とか答えを見つけようとしたが、満足する本はない。そこで、魚類の分類学ばかりでなく、1種類の魚を取り上げた本を作ろうと思ってできたのが『富山湾魚類図鑑』である。この頃スーパーで売っている魚は、刺身・切り身になっていて、魚の顔が生活から消えている。顔がないと子供は納得できない。食べているものの姿を知らないで、グルメもあったものではない。子供の疑問に答えるためにも、ぜひこの本を学校で読んでもらおうという気持があったが、なかなか学校はこの本を買ってもらえる雰囲気ではなかった。そこで、今回は、私の出版に対する考えに同意し、支援して下さった方々を中心となって、学校や公共の図書館に寄贈してもらおうという形を採ることにした。

この本で、子供たちが自分が食べているものを知りたいことを期待したかった。生き物の形を見ることはとてもおもしろい。そして、『富山湾魚類図鑑』のために撮ってきた写真の中で、魚の顔を中心に撮ったものを集めて『GYOGAN』を記念出版することにした。また、この図鑑の出版から美術館展示へとつながっていった。入善に発電所後 を利用した発電所美術館があるのをご存じでしょうか。今までの常識を覆すような空間を利用して展示する発想の美術館です。自分と造形作家の北岡 哲氏と共に展示会を開催する運びとなった。造形作家によるブリキで作った魚と郷土の高岡銅器で作った魚、写真を透明アクリル版に貼り立体感のある展示会を開催したのである。

立山御遷宮は『万華鏡』がきっかけ

活字の力

1種類の魚を取り上げた本

学校や公共の図書館に寄贈

魚の顔を中心とした写真集出版

## (6) 越中の人

『万華鏡』・『霊峰立山』・『魚類図鑑』とテーマを変えてきたが、人が見えてこないと思った。同じ富山に生まれて富山で育った人、その功績を知らせるのが必要と考え、人物誌『越中人譚』を出版することにした。作成にあたっては、まず、テーマを決め、そのテーマにあった人を3人ずつ決めた。『越中人譚』のテーマ※3を決めるときに、漢字2文字でいこう（インパクトがあるのではないかと考えた。そして、一人当たり4ページで構成していく。富山県史には人物伝がないので、人物も後世に残さなくてはいけないという思いもあった。

出版業界では、出版物は未発表時には秘密にするものだが、自分の場合は、出版前にいろいろな方面の多くの人に話をして反応を見る。そして、構想後3~6ヶ月の冷却期間をへて仕事に入ることにしている。

今回の『越中人譚』も、スポンサーを持たない（広告が嫌い・束縛が嫌い・干渉されたくない）方針でいたが、T放送局から、「今回の趣旨に賛同しているので、ぜひ共同でやりたい」ということを言ってきた。最初は強く断ったが、「出版に関してはすべて任せるから、ぜひお願いしたい」と説得され承諾することにした（ただし、私の考えですべてやらせてくださいとは、何度もお願いした）。相手もよく理解してくださって、現在も自分の思い通りにやらせてもらっている。

また、一つの仕事を、方向を変えて考えると、いろんなことにも発展する。例えば、『万華鏡』から[立山御遷宮]、『霊峰立山』から[佐伯有頼像建立（呉羽山に大井冷光の作品にちなんだ像を建立することになった。この企画を任されている。）]へと発展した。

また、『富山湾魚類図鑑』から[美術館展示]に、人物誌『越中人譚』から[テレビ放映]など、一つの展開からいろいろなことが起こるのである。

※3 月刊人物誌「越中人譚」のテーマ  
第1号【郷土】大井冷光・翁久允・大田栄太郎  
第2号【国際】林忠正・高峰譲吉・嵯峨寿安  
第3号【創校】馬場はる・島巖・並木文右衛門  
等

## (7) 大人版総合的な学習

これまでの私の仕事は、ふるさとに関して仕事をやっていきたいという気持ちから始めたことであり、大人版総合的な学習をやっているようなものである。自分の仕事は、興味関心が強いことを追究するので、際限なく広まっていく。ただ基盤は富山であり、ここから離れてやろうとは思はない。関心のあることは積極的にすぐに行動する、学校の先生方も、もっと気軽に遊び心で物を見たり、行動したりしてはどうでしょうか。

ここで一つ、各学校で、有名な方に来てもらって講演してもらうためのポイントを教えてあげます。先般、自遊館前のモニュメントを撮影した。このモニュメントは、有名な建築家の黒川雅之氏※4が制作したものである。この黒川氏と親交

郷土先賢の必要性

出版前に多くの人の反応を見る

一つの仕事を方向を変えて考える

ふるさとに関する仕事をやる

遊び心で見たり行動する

有名な方に講演しに来てもらうには

を持つには、私であれば、このモニュメントの写真を黒川氏に送る。普通なら返礼がくるだろうし、こちらの名前も覚えてもらえ、今後のつきあいにも発展させることができると考える。もし、学校で有名な方を招いて講演をしてもらう計画を立てるなら子供に自らに手紙を書かいてお願いするとか、その子供たちの写真を同封するとか、相手が子供たちのために何かしたくなるような行動や関係を作ることが大事である。多くの子供たちから手紙をもらって講演に来ない人はいないはずである。

一つのことを一つで終わらせない。今、現在あるものを利用する。自分の仕事は、印刷の版を基にしている。この版を生かして、次から次へと発想を転換してものを作る。例えば、図鑑の版を利用し、絵はがきやカレンダーを作る。絵はがきやカレンダーを自分で作ろうとすると費用がかかりすぎるので作ることができない。そこで、絵はがきやカレンダーを作る案を印刷会社へ持って行くのである（写真の著作権を渡すので、絵はがきやカレンダーを作ってはどうか。日頃取り引きしているお得意さんに配ると喜ばれる等の案を出す。このようにして、費用をかけずに作るのである）こういった発想は、子供たちの方が豊かかもしれない。

また、私自身、仕事は何もないところから始め、そしてネットワークの輪を広げながら仕事を進めていくのである。

これまで、『立山』に関連した本を出版※5してきたことで、立山黒部観光社長さんが喜んでくださり、何かご褒美をとという話になった。そこで、「立山入山禁止期間の冬山に、特別に入山し、写真を撮らせてください」と頼み、冬の立山に入山させてもらった。誰一人足を踏み入れてない地はとても素晴らしいものであった。そして、その時の立山に魅せられて撮った写真を集めた写真集『GINREI』を、出版する運びとなった。また、9月下旬から高岡市美術館で写真展もすることになっている。

それから、来年は立山1300年祭にあたる。この立山のことを全国の人々に知ってもらいたいので、1年かけて日本全国のNHK支局をまわり、交渉し、各地のNHK支局から立山の魅力を紹介する計画を考えている。

※4 黒川雅之(1937年～) 建築家・プロダクトデザイナー。照明器具「ドマーニ」、アルミニウム製組み立て家具「インゴットバツタ」がメトロポリタンミュージアム永久コレクションに選定される。富山市の自遊館前のモニュメント制作。

※5 岡田順一氏の出版略歴(p114)

一つのことを  
一つで終わら  
せない

ネットワー  
ク  
の輪を広げる

立山の冬の魅  
力を写真集で  
表す

立山1300年祭

## 2 懇 談

### 質問1 人材の発掘の仕方はどのようにしていますか。

---

人物誌『越中人譚』を例で言いますと、まず、既存のものがあります。それは、県教育委員会発行の『立山を仰いで』という本や新聞社の百科辞典等で基本的なことを押さえます。書籍等によって人名は出てきます。しかし、それだけでは分からないので、調査から始まって、だれに話を聞けばいいのかをこれまで築いてきた自分のネットワークを通して聞きます。つまり、基本的には文献で調べ、新聞記者の方と同じように自分の足で歩いて調査します。

人物誌『越中人譚』の構成で、人物を3人選ぶにしても、話を聞いていくうちにとんでもない大発見の人物が出てきたりします。県民にしてみればどの人も大発見の人なのですが、編集者としては特ダネみたいなもので、してやったりと思うのです。

### 質問2 地域のこと、問題を取り上げていこうとする、自分の思いやこだわりとはなんでしょう。

---

歴史が好きだし、趣味かな。ただ、関心を持っていない人に関心もってもらうように努力しているつもりです。子供の頃の影響が大きいと思います。今は、中学校の社会にしても「記憶力が勝負」というところがあって、これはだめですね。

例えば「ためして合点」という番組がありますが、番組の中身ではなく、作っているスタッフ、ディレクターは、どんな調査をし、どんな番組を作っているか考えてみてください。

先日、「薫製」を番組で取り上げていましたが、放送するまでにどれだけ調査をしたか、なぜ「薫製」を取り上げたかということです。そして番組は、最後には日本の社会のことを考えて終了しました。番組の中には、総合的な学習のヒントがたくさんあると思います。

また、「あるある大辞典」という番組も同様です。一つのパターンにそってやっていますが、パターンを作り上げていくプロセスが大事なのです。

子供たちに、面白さを心地よく体感させなければいけません。そのためには、現代の道具をもっと使うことです。カメラは学校に持ってきてはいけないのですか？もってきてもいいのではないですか。写真は、絵をかくのとは違って、だれでもシャッターを押すことで写真が撮れます。

簡単です。そして、教室に写真コーナーを設けておいて、発表の場をもつのです。将来、プロの写真家が出てくるかもしれません。

ここでは子供たちにもものを見る目、視点を育てていくのです。もっと学校は現代的な道具を導入して教育をするとよいと思います。あまり高いカメラをもってこさせるのではなく、壊れても大丈夫な物がいいですね。

地域ウォッチングをするにしても、カメラがないとできませんね。そういう中で、許可なく人を写してはいけないといった肖像権や著作権の問題、マナーを教えるといいのです。

もっと学校は柔軟性があってもよく、地域の面白さをどうやって発表するか、その子供の視点をじっくり聞いてやることだと思います。

ぼくは日本史に富山の人が出てこないのがっかりして、それが『越中人譚』を書こうと思っ

た一つの動機です。ですから学校からどんどん地域の人材を捜していくことをするといいいのではないのでしょうか。

私がなぜ地域にこだわるのかは明確には答えられません。でも好きな人同士だと、話が盛り上がって「そうなんだよね。」ということになってしまうのです。

### 質問3 『万華鏡』を発行するとき、どういう項目にするか決めるときの考えを教えてください。

イントロが大事です。第1号は、読み手にきちんとコンセプトが伝わるようなメッセージを含んでいなければなりません。第2号以降は、各論になってくるわけです。

『越中人譚』はTテレビ局に、著作権があるのですが、自分の好きなようにさせてもらっています。行政ではどうしても取り上げられない人物がいる。これは民間でやるしかないと思ったのです。

### 質問4 子供にどのようにして、ものをみる視点を養っていけばいいのでしょうか。

岡田さんの子供時代のことを含めて教えてください。

私の少年時代は暗かったです。成績は優秀ではなかったのです。ただ、夏休みの自由研究は好きでした。何をやろうか、ぎりぎりまで悩み考えることが好きでした。

あまり勉強は得意でなくても、変なことにこだわる子供っていませんか。

私の息子もそうなのですが、何か変なことにこだわるというか、食卓の魚を見て、「この魚、オス、メス？」って聞くのです。お魚を食べるときに「おいしい」とか、「まずい」とかいうのがふつうです。こんなふうに、思いがけないことを言う子供をつぶさないということが大事だと思います。「それ、おもしろいね。調べてごらん。」って言ってやることでしょいか。

NHKで「子供相談」の番組をやっていますよね。これは昆虫や動物ですが、身のまわりには、おかしいこと、不思議なことはいっぱいあって、それをつきつめていくと研究論文になるようなことがたくさんあると思います。意外と子供の質問の中にそれがいっぱいあると思います。

自分の息子は「講堂」という言葉を知らず、「体育館」といっています。いつから「講堂」から「体育館」という言葉を使うようになったのか、学校の中で何らかの変化があったのだと思います。そういうことを調べても面白いでしょう。

私は山室小学校の出身ですが、山室小学校の校歌はとても難しい言葉が並んでいました。子供の頃は意味がさっぱりわからなかったけれど、大人になって初めてわかるようになりました。校歌の作詞は、英米文学者であり登山家として有名な田部重治氏であったのです。著書では、登山紀行の『山と溪谷』等が有名である。

さて、県内の学校の校歌を見てみると、立山が見えない学校ほど歌詞の中に「立山」が出てきています。また、立山がよく見える呉東よりも呉西の学校の方が立山登山しているデータもあります。

また、富山市の学校の立山登山率はたった4パーセントなのです。なぜ、立山の見えにくい呉西の学校の方が立山登山をするのか、そういうことを調べいくのも面白いのではないかと。

だから、授業中「ボッと」している子供は何かを考えているのです。「ボッと」しないとアイディアは生まれてこないのです。ですから、そういう「ボッと」した子供を怒らないで、

発表させるくらいにして、子供から学習を引っ張り出してください。

先生は編集者のつもりで、子供が発表したことを何かの機会に使っていくのです。

◎講演記録；横山絵里子（富山市立北部中学校）

◎懇談記録；國香真紀子（富山市立東部小学校）

◎編 集；青木 正邦（富山市教育センター）